
鏡の中のあなたへ

黒枝凧埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中のあなたへ

【Nコード】

N3675L

【作者名】

黒枝風埜

【あらすじ】

魔法士の名門の生まれにも関わらず、剣を取ったリデアラートの物語。

リデアラートが周りを巻き込みながら我が道を邁進する。

似非ファンタジー…のはず。※コメディ要素多量予定

序

深い闇の中真っ白なキミはまるで光のように見えたんだ。ボクは闇に脅えてキミに声を掛けたんだ。

——キミは、だれなの？ココはどこ？

「：イ！リディってば！起きてよ。朝だよあーさっ！仕事に遅れちゃうわよっ？」

騒々しい声と共に視界が白くなった。意識が浮上していく。：まだ起きたくないのに。

「：ん。そんなに騒がなくても聞こえてる」

そう応えたりデアラートに、ふうとため息をついて深紅の髪を持つ従姉妹、リトは更に言い募る。

「そんなこと言ってもだめよ。いつもそう言って起きてこないのはどこのだあれ？」

事実なだけに言い返すわけにもいかない。渋々起きだして時計を見ると：いつも起きる時間より一時間近く早かった。

一瞬絶句したりデアラートだったがはっきりと覚醒してしまった今となっては寝直す気にもなれない。

ため息をひとつついて着替える為にリトを追い出そうとした。そんなにリデアラートを見てリトは驚きに目を丸くして言った。

「どうしたのよ。文句も言わずに起き出すなんて、熱でもあるの？」
そういつて手を伸ばしてくるリトにリデアラートは流石に苦笑して返した。

「なんだよそれは。俺が早起したら天変地異でも起こるとでも？食事の準備は出来てないだろ。どうせだからその辺歩いてくるよ」
「そうそう。嵐でもくるんじゃないの、洗濯物考えなきゃかしら？」

なんてね。三十分後には用意できるだろうからそれまでには戻ってきてね♪」

失礼な事を言い置いて去っていくリトの背を見送りつつ、十八になったんだから少しは落ち着かないものかな。なんて胸の内ではぼやきつつ手早く支度したりデアラートは外へと出たのだった。

リデアラートたちの暮らすこの国、通称ギエン正式にはギエンティア公国といい、大公と民の代表である『議会』という組織によって治められている。

この国は世界有数の魔法士の輩出国であることと、世界最高水準と云われる機鋼技術によって知られている。

リデアラートは正式名称をリデアラート・ディエンティス・グランダードといい一応特権階級の貴族である。

貴族といってもこの国では形骸化しており、優秀な魔法士が生まれ易かったり、重機密技術特権を持っていたりする特定の貴族以外は普通の民と全く変わらない暮らしをしている。貴族であるメリットは大公家に使える時に多少融通される場合があるくらいのものだ。グランダード家は魔法士を多数輩出しており、国の中枢機関で働く者も多い為上の下位に知られている貴族である。

現在の当主はギルディアス。世襲制でもないのに現在四十五歳であるにも関わらず、グランダード家当主で魔法院・禁術取締り委員会の長でもある彼が、リデアラートの父である。

つまり優秀な魔法士であるギルディアスの子供である為当然周囲はリデアラートに期待していたし、幼い頃から魔法士となる為に教育をされる：はずだった。

『はず』というのもリデアラートは魔法よりも廃れつつある剣に惹かれていたからだ。歴史や算術に関する勉強はしても、周りが魔法を教えようとするふらふらとどこかへと消える…。そんなこ

とを繰り返していたからだ。

つまり周りが本人の好きにさせよう：と匙を投げたからである。そして現在二十三歳。リデアラートは所謂『外交官』となり、半年に一度外国への使節を任される程度には認められている。

さて、現在の話は少し置いて話は過去に遡る。リデアラートが八歳になった時のことだ。

ギエンでは八歳になると学院に通う事が出来るようになる。その際にある程度のふるい分けを行う為の試験を受けることになる。

リデアラートは学院通いを希望し、試験を受けることとなった。試験の内容は基本的な学力と手先の器用さ、そして魔力の量を測るモノだ。

リデアラートの試験結果は学力に関してはかなり優秀だった。器用さに関しても平均以上の値を叩き出した。

だが、魔力に関して結果を見た誰もが驚いた。

0だったのだ。

魔力は殆どの者が生まれつき持っておりその上限には個人差があるが普通に暮らしていてもある程度の量は流れ出ている。

測定はその普段溢れ出ている魔力の量を測り、そこから魔力の限界量を推測する装置で測られる。

溢れ出る魔力の量は訓練を積むことで抑えることが出来る、とはいえ完璧に抑えるには十年はかかる。

八歳のリデアラートが完璧に抑えられるなんて出来るはずがない。という結論を教師たちは出した。

魔力の上限は遺伝が大きく関わっていると考えられ、名門であるグランダードのリディアライトには期待していただけに、教導師たちは落ち込んだ。

だがいつまでも落ち込んでもいられず今度は考え込むことになった。なぜならば、魔力が0というものは稀であり数十年ぶりの入学者であるということ。

そして、魔力が無い以上授業として理論を学ぶ事は出来ても実技を行うことはできないからだ。

困り切った教導師たちは思い切って本人および両親に直接尋ねることにした。

先ずはと、両親に話をすることにした。父であるギルディアスは取締役員として現場を駆け廻っており、母であるハルディアは魔法院の付属機関である研究員である為、夕食後に訪問することとなった。名門貴族であるグランダード家に訪問することになり教導師の代表としてきたリランは非常に緊張していた。

なぜならギルディアスもハルディアも優秀な魔法士として話題に上がる有名人だったからだ。

そんな二人の子供の魔力について話すのだから…と。

まあそんな訳で、試験結果をみせながらリランは両親にどうしましようか。と尋ねたのである。

二人は顔を見合わせておやおや。という顔をしていた。

それ程落胆や失望の色が見えないのをリランが疑問に思っているとハルディアが、ちょっと失礼しますね。と出て行ってしまった。

突然の事に戸惑っているリランにギルディアスが話しかけた。

その内容是要するに実技をどうするかは本人の意思に任せる。という事で、八歳の子供に丸投げするギルディアスにリランは茫然と

していた。

そこにハルディアがリデアラートを連れて戻ってきたのである。

こんばんは。と礼儀正しく挨拶したりデアラートは既にハルディアから聞いていたらしく、

「私の希望を言っても良いですか？」

と八歳らしからぬ言葉遣いでリランに尋ねた。勿論、どうぞ。とりランは促し：結果絶句する事になる。

「魔法の実技の代わりに剣術を学びたいと思うのです。勿論実戦剣術を。無理でしょうか」

先に断言しておこう。剣技が廃れつつあり、授業から消えて五十年。そんなことを願う生徒など存在しなかった。何より：彼女は華奢で、可愛らしい女の子だったのだから。

驚きのあまり固まっているリランに苦笑しながら声を掛けたのはギルディアスだった。

「それが本人の希望らしいですが、実践剣術の教師：となると流石に難しいでしょう。それとあなたが心配しているのはすぐに着いていけなくなるだろう、ということですよね？」

そこまで穏やかに話していたギルティアスは、少し間を置いて厳しい顔つきになると言った。

「自己責任です。無理を言っただけでやると言ったからには最後までやるべきですから。何より教導してくださる方にも申し訳ない。見込みがないと教師が思われたなら落第にすべきだと思いますよ」

真剣なギルティアスに気圧されるリランに静かな声が掛けられた。「教師として人としてこの子を案じるのは解ります。一人だけ違う事。それも剣術なんて：と思われてますよね。着いていけない場合今後の授業時間にも関わることですしね」

ハルディアに頷くりランを見つめリデアラートがそれに続けて提

案をした。

「剣術の教師となってくれる方が見つかりましたら、試験をしてくれないでしょうか。見込みがないと言われたら諦めます」

テンポ良く押してくるグランダート家の三人にリランは折れた。それにリデアラートの提案が入学までの期間が短い事を除けばなかなかいい案だと思えたからだ。

「わかりました。まずは剣術の教師を探します。ですが、見つからなかった場合の事も考えておいてください。」

そしてリランは辞去の挨拶をしてグランダート家をでたのである。報告のために学院に戻る道中、リデアラートのことを考えて：面倒なことになったと思うと同時に何かが起きるような期待に満ちているのを感じていた。

教導師リランの災難

リランがグランダード家を訪れて二週間が経とうとしていた。

そろそろ期限が厳しくなっていた。入学期限まで後三週間。(学院の入学試験を受けて六週間後までに入学しない場合入学不許可となり一年間の入学申請不可のペナルティが付く。因みに申請は三カ月に一度、月初めの一週間に受け付けている) 一か月を切っていた。

何人もの教導師を長期間拘束する訳にもいかず、現在では剣術の教導師探しはリランがメインで行いどうしても人手が必要な時のみ他の教導師の手を借りていた。

とはいえ、手を借りるほど有力な人物は多くない…どころか全く見つかっていないのだ。

期限を睨みつつリランの脳裏にはひとつの手段が浮かんできた。それは最後の手段で…自分の精神的負担を考えるとやりたくないと思うことだったが…。いや、学院の生徒の為なのだから！と言い聞かせて、リランは学院長にその案を話すことにした。

そして今リランは学院長その人の前に立っている。学院長は『貴婦人』という言葉がぴったりな上品な女性だ。至極穏やかで多くの教導師、生徒たちに慕われている人格者である。だが一方で一体いつから学院にいるのか誰も知らない謎多き人物でもある。

リランは恐る恐る話を切り出した。

「どうしても剣術を教えられる教導師の方が見つけれられないのです。大公殿下ならば心当たりを教えてくださいさるのではないかと思いますのですが…。やはり無理な話でしょうか…」

大公はグランダード家を遙かに上回る緊張と畏怖の対象である：それ以前に面会を願ったってそう簡単に会える相手ではない。にも関わらず学院長はにこにこリランの前に座って話を聞き続けているのである。

提案を聞き終えた学院長は、

「いいんじゃないかしら。手続きはしておいてあげるから午後一にでも行つてらっしゃい」

と、いともあっさり頷いた。正直、反対されると思っていたので（止めて欲しいとほんの少し願っていた）あまりのあっさりさにしばし理解できずに立ち尽くしてしまつたリランである。

こころよく学院長に追い出：いや背中を後押しされ、リランは大公宮に来ていた。

そして：なぜかお茶を飲んでいた。大公その人と差し向かいで。

小さめの部屋に通されておとなしく待っていたら、ふらりと現れて、

「こんにちわ。どーも話があるんだって？アステイから話を聞いてやってくれて言われたけど、どんな話なのかな。あ、アステイって学院長のことね」

なんて、さらつと言われたリランがまたも固まったのは言うまでもない。

「なんで、なんで大公が一人でふらつと出歩いてる上こんな所にいるのよーっ!？」

などと口に出したわけではないが、頭の中で思いつきり喚いたのは仕方のない事だろう。

「まあまあ。座って座ってお茶でも飲みつつ聞こうかな」

と呆氣にとられて固まっているリランをよそに大公によってマイ

ペースに話が進められたのである。

その結果…本題に取り掛かる頃にはリランは落ち着きを取り戻してはいたが、緊張と驚かされることに疲れ果てていた。

彼女が、何が起ころうとも驚かないわよ。と諦めの境地に至ったとも投げ遣りになったとも言える心境になっていたのも仕様がなかっただろう。

「あの。今回わざわざ面会を願ったのは…」

「詳しい事は聞いてないんだよ。人を紹介して欲しいらしいってことは聞いてるけど？」

先ほどから思っていた事だが、余りにも口調が軽すぎて大公とは思えない…。が、まさかそんな失礼なことを言う訳にもいかない。

それに遠目からしか見た事がないとはいえ、祭典の際に見た事が有るのだから大公には間違いない…だろう。

しかし、思い描いていた大公像が崩れていく音が現実聞こえるようだった…。

そんな思いを隠しつつ…

「当校に今度入学する生徒に剣術を学びたいと希望する者がいるのです…が、剣術の教師がいないのです。あちこち問い合わせてはみたのですが…」

「見つからなかったと」

「はい。…最後の頼りなのです。どうかどなたか紹介出来る方はいらっしゃいませんか」

緊張していた事も嘆いていたことも忘れてリランは勢いよく頭を下げていた。

そんなリランに大公は、

「うーん。心当たりは無いでもないし、そこまで必死になっているのを無碍にする気もないけれど、どうして剣術なんて学ばがったのか。…教えてくれるよね」

尋ねているはずなのに有無を言わせない空気に押されるようにし

てリランは口を開いていた。

「その生徒は、魔力を持たないのです。その為魔法学の実技を受ける事が出来ないのです、その代替として剣術を学びたいと本人が希望したのです」

「魔力が無い：か。その上で剣術なんぞ学びたいなんて物好きだな。：剣術の教師師ねえ。うん、アイツなら丁度いいかな」

大公はしばし、ぶつぶつと呟きながら考えていたがすぐに顔を上げてリランに答えた。

「すぐに動いてくれるのがいるから、明日にでも学院に向かわせるよ」

そしてなにやら含みのありそうな笑顔で頷いたのだった。

それを聞いたリランは、これまたあっさりと快諾されたことと、期待していたとはいえ剣術を修めている人物が身近にいるような発言に、今までの徒労を思っ泣きたくなっていた。

それでも剣術を望んだいわば諸々の根源であるリデアラートに対して恨みを抱かない当たりは教師師として立派な態度であると言ったところか。

だが、大公宮から学院へと戻る彼女の背中に疲労と哀愁が漂っていたのは気のせいではないだろう。

大公がなにか企んでいることになど気付かずに…。

リランは学院へ戻るとまず学院長へ結果報告と紹介してくれた事に対するお礼を述べに行った。

学院長は相変わらずにこやかにリランの話を聞き、

「良かったわねえ。お疲れ様」

と、いつもと変わらず穏やかに頷き労った。

教師師部屋に戻ったリランは仲間に良かったね。おめでとう！と

普通に祝され感涙したとかしないとか…。

こうして、リデアラートの学院生活の受け入れ準備はようやく整いつつあった。

試験開始

「初めまして。リデアラート・ディエンティス・グランダードです。今日はご指導のほど宜しくお願い致します。」

剣術試験はリデアラートの挨拶で始まった。

挨拶を受けるは20代後半と見える青年が一人と、30も半ばと見られる壮年の男性が一人。

三人から離れるようにして立つリランは今朝、大公宮から来た二人と話した時の事を思い出していた。

「おはようございます。トウマ・ヒエンです。剣術の指南役として派遣されてきました。よろしくお願いしますね」

「同じく剣術指南役のランディ・エヴィアットだ。よろしく頼む」
さわやかさを撒き散らしている青年トウマに対し、ランディはなにやら不機嫌そうだ。

「お、おはようございます。リラン・ハーティスです。こちらこそよろしく願います。この度は指南役を引き受けて頂き本当にありがとうございます」

ランディから発せられている空気に気圧され気味では有ったがリランもなんとか挨拶を返す。

「あーもう。怯えてるじゃないですか。もつとにこやかにできないんですかー？」

「…」

（まっまでもそんな人だと思ったのにいい。駄目だこの人。絶対わざとだ。）

ああ。ランディさんの額に青筋が見える気がする…。

平和の二文字は何処へ行ったのよ）

例えリランでなくともこんな二人の間に立っていたくないと思う

に違いない。

心で泣きごとを溢すリランを置いて二人の間はますます陰悪な空気が流れている。

「一体全体どうして貴様と二人で学院になんぞ来なくてはならないのか。」

俺は未だに納得してはいないからな」

「そういうこと言っていないんですか？ どうしてなんてきまつてるでしょう？」

言葉を切ってくすり。と溢すトウマの笑みが怖い。どーみても、どー聞いても挑発している。

それに気付いているだろうランディのどんどん深まる眉間の皺も…見たくない。

逃げてしまえたらどんなにいいだろう、と思いつつも案内役である以上逃げる訳にもいかないリランは哀れである。

「殿下の仰せだからに決まってるでしょう。」

大公殿下のご命令に逆らえるんですか？ 代々篤い忠誠心を謳われるエヴィアット家のあなたが。

家は置いてもあなたが殿下のご命令に逆らえるはずもないですよ
ね」

語尾に♪が付いていそうなかろーい口調でにこやかーに喋られても喧嘩を売っている事には変わりはない…。

ぶちっ…と音が聞こえた…気がする。もちろん音の発生源はラン
ディで…。

「それは貴様もだろーがっ。というか殿下に逆らえる人間なんぞ人間ではないっ。」

あの恐怖の大魔王というべきドSに逆らえるとても!？

第一辺境隊の俺がなんで指南役をする羽目になるのか反発したくとも出来るわけないだろうっ」

なにやら聞いてはいけないコトを聞いてしまった気がする。

「そうですね。私もいろいろ聞きたいんですけどね。殿下には。なんで文官の私が回されたのか〜とか〜ね」

「：あーもしもしトウマさん？もしや殿下に怒っていらっしやる：とか：あははー：」

黒い笑みを浮かべるトウマに、怒りを凍結させ、ひきつり笑いを浮かべるランディがそこにいた：。

挨拶で朝のやり取りを思い出して鬱な気分になっていたリランだが、生徒の前では問題なさげな二人で安心していた。：と同時に、あの二人だけの場に居たくないと痛切に思ったのは仕方のない事だろう。

「さて、試験ですが：コレを捕まえられたら合格としましょう」

トウマがコレといって見せたのはガブル（いわゆる妖魔の一種で、丸い体に翼と鋭い爪の有る短い脚がついている。見た目は結構可愛らしいが、動きが素早く集団で出られると結構厄介なヤツである）だった。

「まあ見て解るとは思いますが、ガブルです。ちゃんと『縛って』有るので安心して追いかけてくださいね。」

ガブルを見て顔を強張らせたリランにトウマが補足する。縛るとは妖魔を使い魔とする契約の一種で、基本的には人に害を加える事を禁ずる契約である。

「ただ追いかけるだけじゃ試験にならないからな。俺が邪魔する。質問は有るか？」

「制限は有るんでしょうか」

表情を全く動かさずに一言だけ発するリデアラートに、トウマは一瞬何か考える素振りをしたがすぐに、

「周囲に被害を出さない事。範囲は学院。他には？」

リデアラートが首を振るのを確認しトウマはガブルを放した。

「はい。では試験開始。2人とも行ってらっしゃい」

こうして実にあっさりと試験は始まった。

逃走、反撃、撃墜

リデアラートは走っていた。ガブルを追いかけているのだから当たり前だと思われるかもしれない。

しかし、ガブルを追いかけている訳ではないのだ。正しくは逃げていたのである。ランディ・エヴィアットから。

ランディの仕掛けた邪魔とは、ズバリ捕獲である。捕まった場合魔法で縛られて転がされるのである。

まあ数分たてば解けるがその間もガブルは逃げ続けている。

学院は広い。座学の行われる学舎が2棟。魔法実技の行われる耐魔館が4棟。図書館。体育館が4棟。実験棟が2棟。機鋼館が2棟。全生徒を収容しても余裕のある講堂。そして『庭』と呼ばれる森が広がる。

1時間経った時点で既に2度リデアラートは捕獲されていた。当然ガブルはとっくに見失っている。逃げてばかりいても先には進めない。ランディを撒く事が出来ない以上なんとかする必要があった。

二人と一匹の繰り広げる追走劇を開始地点第一学舎の前で二人が見ていた。

見ている二人は勿論、教導師ランとトウマである。

学舎前の池に逃走するリデアラートと追いかけるランディさらに逃げるガブルという三つの風景が映し出されている。使い魔の見える風景を水に映しているだけです。といとも簡単にトウマは告げたが高等魔法もいところ。機鋼技術を使った方がよっぽど楽である。第一あなたはどれほどの使い魔と契約を交わしているのだ、とリランは思ったが口には出せなかった。

「おや、ランディと正面から行きますか。なにをするんでしょうね」

面白そうにトウマが言う様に追いかけてきたランディを待ちかまえるリデアライトが水鏡に映し出されている。

向かえ討つりデアライトの口元には始まる前の無表情とは打って変わり、心底楽しそうな笑みが浮かぶ。

「先生。私やられっぱなしは性に合わないんですよね。行かせて頂きますっ」

言うが早いかランディに向かって球状の物体を投げつけた。

「なっ」

手ではじこうとしたランディの手に当たった瞬間物体は粉となって宙に散った。

「卑怯な手ですが手ぶらじゃ無理そうだと判断させていただきました。マルネって知ってます？結構その辺の道端に生えてるんですけどね。ちよつとした痺れ薬になるんですよ。今度はこちらが数分イタダキマス」

ランディの足止めに成功したりデアライトは学院で最も高い場所。講堂横の鐘楼に向かった。

後に残るは痺れる手足を抱え油断を嘆くランディが一人…。

―――第一学舎前

「へえ。マルネ…ね。よく知ってるなあ。『グランドード』は伊達じゃないってか。

それにしても引っ掛かるとは情けないね。そうは思いませんか？リラン先生」

「え。…あ、いえ…。そ、それより彼女…先程摘んでませんでしたか？即席で作った…ということでしょうか。お恥ずかしいことです。がマルネが痺れ薬になるなんて…」

同意を求められたリランだが、同意するより疑問を解決したいと考えた。

教師師の多くは学求の徒でもある。リランもその例に漏れず疑問を追及するタイプだった。

「気になりますか。なりますよね。まあ知られてませんし。というより余り知られちゃまずい類の知識なんですよ。その辺によく生えてる雑草が痺れ葉になるなんて：問題でしょう？」

笑みをうかべてそう告げるトウマになにやら冷や汗が流れたりラッンだった。

蛇に睨まれたカエル状態のリランを見て続けたのは、

「世の中知らない方がいい事っていうのは有るんですよ。ね？そう思いますよね」

必死に音がしそうな勢いで首を振ったリランは間違っではないだろう。

「まあ。逃走中に調査したのは間違いないでしょうね。：ちよつと優秀過ぎるかな：要注意。」と

後半は聞き取れない小さなつぶやきで。

———鐘楼にて

リデアラートは鐘楼の最上部、鐘の吊られている更に上。すなわち屋根の上に立っていた。

「ガブルの習性。水辺に引き寄せられやすい。特に透明度の高い湧水。好物。ガスパドの実。1度に飛ぶ距離。100m程度：だったかな」

念のため周囲を見やるがガブルらしき影は見当たらない。

「まあ。最初の条件だけでも大分絞られる。透明度の高い池は結構有るけど湧水は二箇所のはず。んーランディ先生が追いかけてくる前に近い方から回るのが利口：かな」

よつと掛け声を掛けてリデアラートは屋根から内側へと飛び降りた。

「いろいろ抑えないと怒られちゃうもの。わたしはやらな

つと問題発生するよねえ多分。トウマ先生の方は鋭そうだし、油断は禁物。うん、がんばろっ」
ぶつぶつ呟きつつひた走る。

湧水の湧く場所は西南の森の泉と講堂北の図書館の裏側に広がる池。鐘楼から近いのは勿論図書館裏である。何ともうってつけな事にガスパドの樹が立っており丁度実をつけていた。利用しない手はない。取り敢えず…実を？ぐ。

ガサっ…

「…え？あつやばっ」

灌木の茂みに隠れていたらしいガブルが逃げようとしていた…ところ…？いだ実を投げつけていた。

バシィッ…ふらふらふら…ぼてっ。擬音化するとそんな感じにガブルは地面に這っていた。

「……あー…。痛そう…」

思わず合掌してから、がしっと掴み。徐に宙に向かって、

「えーと。捕獲…しました、よ？」

と、呼びかけるリデアライトだった。

————— 第一学舎前

『捕獲…しました、よ？』

「おや、気付かれていたようですね。ま、試験は終了です。向かいましょうか。

と、その前に」

トウマは片手で印を結ぶ。そして、池に映っていた風景を元に戻してからリデアライトの元へ歩き出した。

リランとしては、言いたい事は山ほど有るが。何も言うまい。気分としても複雑だが、無視することにして、後に続いた。

———
鐘楼前

ランディの前にトウマの使い魔が降りてきた。鳥に似た外見の妖魔である。ランディの肩に止まり喋り出した。正確には、トウマの言葉を伝える。

「試験は終了です。図書館裏の泉に来るように。

ああ、一つ言いたい事が。痺れ薬も防げないなんて情けないですよ？一度鍛え直して来たらどうですか？」

∴トウマの黒い笑みが見えるようで腹立たしいことこの上なかった。

試験結果

…ああ、キレイな夕焼け。明日はきっと晴れよね。

突っ込みは要りません。そっとしておいてください。愚痴りたくても他言無用な事を誰に愚痴れるとッ。誰か私の平穏を返してください…。そして、知的好奇心の追及の自由を！安全に！

…無理だから今こうして心で泣いている訳ですが。

「お疲れ様。結果だけど合格ってことで。ガブルも捕まえられなし、ランディも対処できたからね。問題ナシナシ」

リランの心の声など知らずに（知られても困る。）あっけらかんとトウマが言う。

正直、トウマに対しての苦手意識を植え付けられたリランとしては、関わりたくない。同じ職場なんて逃げ場がないじゃない！というのが本音だ。

「おめでとう。リデアラートさん。学院は貴女を歓迎します。

私は学院の教導師、リラン・ハーティス。貴女の担当教導師となりました。何か有ったら相談しに来てちょうだい。もちろん他の教導師に相談してくれてもいいけれど」

顔は笑顔で、新入生歓迎の定例の言葉を述べる。

「ありがとうございます、リラン先生。これからよろしく願います。

トウマ先生とランディ先生も。剣術の教導師引き受けていただけて嬉しいです。よろしく願います」

試験開始時とは全く違う感情豊かな、弾むような笑顔で頭を下げるリデアラートは年相応で可愛い。

（ああ、今日唯一の癒しだわっ）とかなんとか思いながら、リラ

ンはリデアラートに書類を差し出す。

「これは授業日程表です。授業の開始は休養日明け、3日後からとします。その書類に書いてある物を最低限持つてきてくださいね。

あ、それからこちらは、クロト君に。要望通り、リデアラートさんと同じ日程で組んで有りますので」

トウマにも書類を渡す。トウマ達が教導師を引き受ける際に、頼まれたものである。一人特例として、生徒として学院に入れて欲しい子供がいる、と。勿論簡易とはいえ学力テストも受けてもらってあり、その辺りに問題が無い事は確認済みである。

トウマの説明によれば、現在彼が教えている、所謂弟子らしい。今回教導師になるにあたって、別々に教えるより、まとめて面倒見た方が早い。という結論に至ったらしい。

「クロト君：ですか？トウマ先生のご子息ですか？」

不思議そうな声が聞こえた。と同時に吹き出した人物がいる。

「あははははっ。

く、クロトがトウマの息子……っ。駄目だ、わらえっ」

「笑えなくして差し上げますよ」

どごとと痛そうな音がして笑いが止まる。言うまでもないだろうが、笑ったのはランディ。そして彼を殴り倒したのがトウマだ。

「リデアラートさん、クロトは我々が預かっている……そうですね、弟子のようなものです。

丁度良い機会でしたので、彼にも誰かと学ぶ場を、と思ったのですよ。

我々の授業を受ける前提でしたので、貴女と同じ授業日程でということにさせて頂いたのです。

少しばかり協調性に欠ける子ですが、仲良くやっていたけると助かります」

にっこり。とすがすがしく笑う彼の後ろには転がる死体が…。

「死んでないから」

笑いを堪えてか、痛みを堪えてか語尾を震わせてランディが主張する。

トウマの方からチツと舌打ちする音が聞こえたような気がしたが、そちらは見ない、見たくない。リランはそちらから視線を逸らしてリデアラートを見やり、声を掛ける。

「で、では、三日後にまた会いましょう。楽しみにしていますよ」
笑って、ムリヤリ話を切りにかかる。笑うに笑えない極寒地帯に居たくなてない！

「そうですね。気をつけてお帰りなさい」
貴方にあっさり同意されると裏が有りそうで怖いんですが…。
「そんなことはありませんよ？」

今日はありがとうございました、休み明けからよろしく願いますね。と素直に帰って行くリデアラートを見送るリランの笑顔が崩れる。

「！？あ、あのっ読心術の心得でもお有りで！？」

先程からピンポイントで反応が帰ってくるのが怖くて仕様がないので…。

「ええ、まあ…読心術というか、ちょっと人より表情を読むのが得意なだけですよ」

「おいおい、からかって遊んでるんじゃないよ？リラン先生、取りあえずは一年、よろしく」

「よ、よろしくしたくない…」

…しまった、口から零れてしまった…。覆水盆に返らずっ。もしくは後悔先に立たず！とどのつまり…口を押さえて恐る恐る二人を見やることしかリランにはできなかった。

視線の先にいた二人はと云えば、くすくすと笑っており拳句の果てには、

「素直な方はいいですね。そうは思いませんか？ランディ」
などとトウマがのたまい、それに答えてランディが、

「口を滑らせる位の可愛げのある様な奴は俺らの周りにはいないからなあ」

と、遠い目をする。なにやら妙なまったり空間が出来上がりつつある。

「私、からかわれたんですね…」

肩を落として嘆くリランを慰めてくれるモノはこの場にはいない様であった。

試験結果（後書き）

ここまで来るのに何カ月掛かっているのでしょうかorz
取りあえずここまででリラン先生視点は終わりとなります。

次話は大公宮とグランダード家における授業開始前日当たりの話を
チヨコつと書こうと思っています。

最後に、遅筆にも程がある上拙い文章を読んでもうださっている皆様、
本当にありがとうございます。

それぞれの含むところ

———大公宮の庭の一角

大公宮に戻ってきたトウマとランディが真直ぐ向かったのは宮庭の一角、木々に隠れるようにそこには東屋がある。

「お帰り。どうだった？」

片手を上げて楽しそうに問うてくるのは大公その人。

「どうだった…って知ってるんでしょ？」

器用に片眉だけピクリと反応させて、皮肉気に答えるトウマ。

「いいから、いいから。お前たちの報告が聞きたいんだけどな？」

ふう…。と溜め息をひとつ。

「要注意人物…でしょうね」

大公の瞳に面白そうな光が宿る。

「どうしてそう思う？」

「…あの娘が使った薬ですよ。グランダード家は一体何を教えているのやら…」

「単なる痺れ薬じゃなかったのか？」

薬を使われた張本人、ランディが口を挟む。

「アレは、マルネの毒だよ。問題なのは知識だけでなく実践する能力を持っていることだ。」

ランディから逃げつつ的確にマルネを採取し、そこから精製まで行い、後遺症を残さずに一定時間敵を無力化するだけの適度な量を散布。

普通の娘のやる事じゃないですね。というか8歳の子供として異常です。

『歴代最強』のグランダード家当主の娘はどんな教育を受けてるんでしょうね？」

「どんな教育を受けているのか、それは俺も気になるな」

トウマの言葉を引き継ぐようにランディが話し出す。

「あの娘全力を出していなかった」

「あなた相手にですか？」

思わず、という様にトウマが零す。ランディはそれに頷き続ける。
「それなりに俺も手は抜いていたが、その俺より少し遅いくらいで走り続けていたと云うのに最後まで息を切らさずに動き続けていたんだぞ？」

別れ際に基礎体力作りをしておく様に言おうと思ったが、余りにも馬鹿らしくて言う気も失せた」

「あんた達グラランダード家の娘とやらの試験に言ってたんだよね？で、全力を出さずに合格をもぎ取られたって訳？面白い」

いきなり幼い声が屋根の上から降ってきた。

「…クロト。話をする時位、降りてこい」

「気にするな、ランディ。話をするのに支障はない」

説教する態勢に入ろうとしたランディを大公が止める。

まあ確かに、屋根の上に居るのを知っていながら、声を出すまで三人共咎めなかったのだから今更と云えば今更ではある。

「で？なにが面白いって？」

大公が淡々とクロトに問う。

「補佐官に危険視されるほどの知識の持ち主で？ランディ將軍閣下と渡り合
う子供だぞ？興味湧かない訳が無い。ついでに大公殿下までなに
やら楽しんでるようだし？」

素直に話したんだから少しくらいはカード開けてくれない？」

面白いと言いつつ、話す言葉には感情は全く込められていない。

「お前森から出てきて一月も経ってないのに詳しすぎだな？」

お前も十分面白い」

大公が楽しそうに言った途端屋根の上からイヤそうな気配がした。
こうしてからかうと素直に反応する辺りは子供らしくて結構だと思
う。

他の二人も気になるようなので話すことにする。

「グランダード家には今、元暗殺者が住んでいる」

「へえ。どんな？」

クロトは好奇心に従順だ。物怖じせずに訊ねられるのは新鮮だ。

「腕利きだよ。ついでに私の友人なんだ。」

ただなあ、面白い事にグランダード家に関して訊ねてもどうでもいい事しか教えてくれないんだよ。

特に娘に関しては何も教えてくれないんだよね」

「…なんだそりゃ。大公に聞かれた事をはぐらかす程度には大公と対等な友人である暗殺者？人間社会に疎い俺でも分かるぞ。存在自体が出鱈目だな？何者だソイツ」

「その大公にぞんざいな口を利いているお前の言う事じゃないがな」ランディが呆れたように突っ込む。

そして大公にとって、危険性を理解していながら無造作な態度を貫く存在は、貴重で面白い、ということになるのだが。まあ、それは置いておいて。

「トウマとランディは知っているとと思うぞ？」

通称『黒の仮面』聞いたことあるだろ」

2人が驚いているのを眺めてにやつく大公は性格が悪いとクロトは思った。

「ちょっと待ってください。元暗殺者って黒の仮面が引退していたんですか！？」

というか、黒の仮面と友人なら紹介してください！」

我に返ったのはトウマが先で、頭突きする気か？というくらいの勢いで身を乗り出した。なんか私情が結構含まれている気がする。

「知らない訳が無い…裏社会の伝説だぞ…？」

ランディはランディで盛大に溜め息を吐いて、

「…そういうことか。マルネの知識は黒の仮面の仕込みという訳か」ぼそりと呟いた。

二人の反応を楽しみつつ大公が答える。

「だろうな。グランダード家は魔法士の家系だ。痺れ薬だとかの教育は流石に無いだろうよ。」

まあ、そんなところか。三人共、頑張れよ？楽しみにしているかな？いろいろと」

大公殿下は終日とても上機嫌で、対象的に側近と云われる二人は疲れ果てていたらしい。

――――グランダード家

「お帰りなさいませ、お嬢様」

門を入ってすぐにリデアラートに声が掛けられる。どれだけこっそりとも入ろうとも彼の挨拶が無い時は無い。

「うわー、お嬢様はやめて下さい師匠。ただいま帰りました」

彼はくすくすと笑いながら柔らかな口調を崩さずに咎めてくる。

「庭先ではガイと、呼び捨てして下さいね……誰が聞いているとも知れませぬので」

後半はリデアラートにしか聞こえない声量で囁かれる。それと同時に一瞬だけ鋭い視線が周囲に放たれる。自分に向けられたモノではないと分かつてはいても背筋に冷たいモノが走る。

「それから、試験合格おめでとうございます、リディ」

屋敷に入ったところで祝いの言葉が告げられる。相変わらずの早耳だ。

「ありがとう、師匠」

笑って応えた所に爆弾を落とされる。

「手ごわい相手だったでしょう？将軍と補佐官は」

リデアラートの笑顔が固まり、血の気が引いた。

「しょうぐん……ほさか、ん……？何の……冗談……です、か」

冗談だと言って欲しかった。

「残念ながら事実です。頑張って隠し通してくださいね」

無情にもあっさりと否定されてしまった。

秘密を抱える彼女は、国内トップクラスの実力者相手に隠し通さねばならないという事実に打ちのめされていた。

その後彼女は、休みの間、おかしい：剣術を学べる事を純粹に喜べていたのに。こんなに大量の障害物を教えられるなんて。とぼやいていたらしい。

このようにリデアラートに学生生活の始まりとなる一日は終わった。

一日の始まりは気分良く

さて、今日はリデアラートの授業開始日である。

学院がリデアラートに用意した座学は以下の通りである。

算術 歴史 地質学 魔法理論 機鋼理論

勿論これ以外にも用意はされているが、専門分野に繋がる学問になるので、その道へ行こうと考えている人の為の選択科目となっている。もちろん希望すれば見学も可能である。いろいろ学んでみたけど…と全く別の分野に進む者も少なくない。

同様に用意されている実技は、機鋼に剣術。

因みに学院が通常最初に学ばせるのは、機鋼と魔法の二つである。これは、ギエンの産業である機鋼と魔法を廃れさせない為のものである。勿論人には向き不向きが有る為、初年度のみ必修となる。とはいえ、この二科目に関しては、初年度からかなり密度の高い授業となる為一年しか学ばなかった生徒もかなりの技術を持つ事になる。国の至る所で一般市民が自然に機鋼と魔法を日常生活に用いるのはギエン独特の風景で、それを可能にする教育の質の高さは国力を周辺諸国に示すことに繋がっている。

そんな訳で、リデアラートが魔法を学ばないのは本当に例外中の例外なのである。

清々しい朝の空気を吸う。リデアラートリデイは街を一望できる丘の上にいた。

——今日からか…。正直まだ人前に出るのは早いと思うんだが、な。

「まだ言ってるの？大丈夫よ。第一下手に年を取ってから入学して変に目立つより、馴染んでしまった方が違和感なんて感じさせないわ。」

魔法にしたって……よっぽどの事がなければ気付かれるはずもないわ。安心して頂戴」

——それも心配といえば心配だが、それより……。

お兄さんは、可愛い妹を誰にも見せたくないんだけだな？

「はいはい。言ってなさい」

リディは自分の中の兄と会話をする。傍から見れば独り言を呟く可笑しな子供だ。

勿論自分の中の人格なのだからお互いに思考するだけでのやり取りはできる、が会話するのに声を出さないと違和感が有る！というリディの意見により、ごくたまにこうして人目につかない場所では、リディだけ声を出しての会話をするところがあるのだ。

なにより、今日から集団生活が始まる、ということにリディも多少は緊張しているのだ。

今までグラウンド家で暮らしていたリディの世界には、両親とガイの三人しかいなかったのだから。

それにしても……と思う。違う人格であり、有る程度の隠し事は出来るとはいえ……。なにを心配しているのだろう。馬鹿な事を言って誤魔化そうとしたが、誤魔化し切れていない。隠すならもっとうまく隠せ、とまで思う。

——……全く。聡いのも考えモノだね。

俺が言うまでもないだろうが、我々は特異な存在だ。人間は異物を嫌う……。

お前の持つ知識、技術、そして経験。どれも普通じゃないレベルだ。

俺はお前に泣かれたくないんだよ。可愛い俺達のリディ。

ふう。と溜め息を吐く。全く、この自称兄は本当に過保護だ。

「馬鹿ね。例えそんな目に有ったとしても、絶対に私を排除しない人を私は知ってる。

そうでしょう？お父様もお母様もガイだって居るわ。あなただっているでしょ？ディー。

そうして支えてくれる人がいる限り私は大丈夫」

ディーが苦笑する気配がする。

――だいいが。

それはそうとのんびりしているけどいいのか？
楽しみにしている新生活に遅れるぞ

「え、うそ！？入学早々遅刻なんてごめんだわ」
急いで丘を下って学院までの道を走る。

通常使わない様な道まで使って急いだお陰か始業よりも前に最初の教導室までたどり着く事が出来た。

教導室の中に居たのは、3人の少年と1人の少女。
取りあえずは遅刻することなくたどり着いた事に安堵しつつ、手近な席に座る。

落ち着いたところで観察することにする。
自然と目がいったのは、紅一点の少女である。10歳程だろうか、少し高めの身長と背の半ば程まで有る金髪が特徴的だ。私が気になるのかちらちらとこちらを見やっている。だが、話し掛けられたわけではないので放置する方向で。

その少女の隣で賑やかに喋っているのは、くるりとした巻き毛で印象的な赤髪の私と同じ8歳くらいの少年と、10歳くらいの茶髪の少年。

そして彼らから少し離れた所に座る黒髪の少年。これまたおそらく10歳だろう。と当たりをつける。

そんな事を考えていたらトントンと肩を叩かれた。

「はい？」

そこに居たのはこちらを気にしていた金髪の少女。近くでみると金髪碧眼の美少女だ。なにやら少々ご立腹の様だが：私何かしただろうか？

「あなたこのクラスに来るの初めてよね。新入生かしら？」

「ええ。初期科目と魔法理論学はリラン先生に担当してもらおう事になりましたので：あの、なにか問題でも？」

問題を起こした覚えは無いので、聞き返してみる。

「いいえ、なら一年は一緒ね。よろしく、あたしはマルティナ。マルティナ・アマレット、学院三年目」

こうして微笑まれると、きつい印象が薄れて可愛らしいなあ。なんてどうでもいいことを考える。

「こちらこそ。私はリデアライトです。リデイと呼んでください」

名前だけを名乗る。グラウンドだなんて名乗ったところで意味は無い。それどころか魔法が使えないことについてうるさく言われる可能性の方が高いのだから。

そう思っていたのに、マルティナに怪訝そうな顔をされて、ディエンティスを家名として名乗っておけばよかったかもなんて思う。

この国では一般的には名前・家名となる。

貴族は名前と家名の間に、称号が来る。生まれた時に付けられる物で、身内が付ける場合もあれば、預言者や、占術師が付ける場合もある。まあ、現在ではほぼ形骸化しているが、預言者達によってつけられた場合それによって将来が決定されていた、という過去もあるらしい。

更に王族だが、彼らは名前と称号を隠す。例えば現大公はクレスト・F・C・ギエンティアと名乗っている。クレストというのは通り名に過ぎず本名ではないと云う事である。

名前を呼んでもらえないのは、寂しくは無いのだろうかと思うが、余計なお世話と言ったところか。

家名の無い者は、孤児に多い。他に外国から来た人にも家名を持たない者はいる。

余談になるが、ディエンティスの意味するところは、『糸の紡ぎ手』。預言者に付けられたらしいが：彼の者は私に何を見たのだろうか。

よし決めた、家名を尋ねられたらディエンティスを名乗ろう。下手に孤児だと思われて同情されて、注目を集めるのも厄介だ。

「まだ怒っているのか？」

苦笑まじりに声を掛けてきたのは茶髪の少年。

声を掛けてくれたおかげで、名前の話から離れてくれそうだ。ついでに、彼の疑問は私も聞きたい。取り敢えず怒りの矛先が自分に向いていないことは分かったが、そんなにとげとげしい空気をばら撒かれたら：うっかり応えてしまいそうだ。

そこで気付いてしまったことが有る。少し離れた所にいる少年からも、不穏な気配がする。うまく隠してはいるが、彼が発している気は殺気に近い。刺激しないように自分の気配を抑える。

「あの、なにか有ったんですか？」

物騒な気配には関わりたくはない、が原因を把握しなければ更に状況が悪化する可能性がある。

発生源である二人が話そうとはしていないのだから知っているであろう第三者に聞くしかない。

「あそこの彼とちょっと意思の疎通が図れなかったんだよ」

そう言って示された先には勿論黒髪の少年がいて、

「意思の疎通？会話もしてないのに出来る訳ないじゃない」

マルティナはそう言って横を向いてしまった。

——あー、うん。分かったような分からない様な……。ディー、お願い。解説よろしく。

——こらこら、まだ始まったばかりだろう？と言いたいところだが、ほっとくと不味いことになりそうだね。仕方ない。まあ、その彼女がリディに話しかけたように彼に話し掛けて流された……というか無視されてしまったってところだろう。恐らく、だけどね。

——…ねえディー。もしかして、もしかしてなんだけど、あの殺気はそう言う事なの？

話しかけるな、それ以前に近づくなっていう意思表示？

——多分そう。殺気で警告だなんて随分と野生動物みたいな奴だね。

語尾にはっはっはといった感じの笑いが付いているような気がした。

理解は出来たと思うのだけれど、なぜ脱力感まで与えて行くのか……。

——ああ、忘れているみたいだから、ついでに教えてあげる。リディと同じ授業を受ける新入生がもう一人いるんだろう？

はっとする。

つまり、彼が『クロト君』か。

：トウマ先生にひとつ文句を言いたい。どこが『少しばかり協調性に欠ける子』なんでしょうか。

少しじゃないだろ、というか拒絶しているよね！？協調？なにそれ。って鼻で笑い飛ばしている感じですよね！

それに加えてトウマ先生の弟子。

この状況やばくないでしょうか……。

一日の始まりは気分良く（後書き）

随分と長い朝となってしまいました。まだ授業が始まりません。改めて読み直すと年齢の割に随分と大人びた子どもになってしまいました。

違和感がひど過ぎるようなら年齢設定を直そうと思っています。

過激に刺激的？

あー、始まりから前途多難だなんて酷い話よね。溜め息の一つも吐きたくなるのは許して欲しいわ。

さて、この暴れ出しそうな険悪な空気、どう蹴散らしてくれようか。

…これって集団生活初心者の仕事じゃない気がする。

「そういえばまだ名乗ってないよね。エルシオ・オルガノ・ベルスティーニ。学院6年目になるんだ。

なにか分からないことが有ったらいつでも聞いてね」

なら、今すぐこの状況の解決法を教えてください。なんて言えるわけがないが。

「それから、あそこで寝てるのがディン・ダグラス。あいつは今年2年目だよ」

この状況下で寝ていることに驚きだ。とうにかさつきまで賑やかに喋ってませんでした？

リデイが衝撃を受けている間もエルシオは話し続けている。

「ディンは商人志望でね、よく朝市も覗いてるらしいんだけど、寝不足でたまにこうして寝ちゃうんだよ」

「はあ、朝市行った後に寝てしまったら意味がないような…」
気が抜けてぽろっとこぼしてしまった。…気が抜けた？

——良かったね殺気を納めてくれたみたいだよ、彼。
ホントに注目されたくないようだね。

笑いながら放たれたディーの言葉に納得だ。だが、と思う。
私にはエルシオさんの様に喋り続けることはできません。

集團生活開始早々に挫折感に襲われたリデアラートだった。

さて和やかな空気に戻ったところでエルシオに名乗った。今度は教訓を生かし『ディエンティス』と家名につけて。

そして、マルティナと三人でとりとめもないことを喋っていた時、「おはようございます、遅れてすみません。皆揃っていますか？」リラン先生がようやく来た。

「分かると思いますが今日から初等科目と一緒に受ける新入生が二人います。最低一年は私の担当ですので、問題だけは起こさないでくださいね」

リラン先生は何も知らずに、にこやかに笑っていらっしゃいます。が、なんかもう起きた後のような気がします。いや、手は出てない様だから起こりかけ？まあ何にしろ、穏やかな日常とはいかないのでしょうね。取りあえず、もう少し早く来て欲しかったですリラン先生…。

「クロト君とリデアラートさん。

改めてようこそ学院へ。あなた方にとって実り多き日々となりますように」

グランダート家の名前を出されることは無くて安心した、と同時に黒髪の少年がクロト君だと証明されてしまった。

「早速授業を始めましょう、と言いたいのだけだ。…ディン君？そろそろ起きないと…私手が滑っちゃうかもしれないわね？」

そう言いながらリラン先生は参考書として指定されている分厚い本をディンの頭の上に持っていく。

———も、もしかしくても…。

———落とすんじゃない？

——うわうわうわー…うそっ。あれ角だよ、角！絶対イタイよアレ！

思わず、デイーと会話してしまったリランの目の前で惨劇が起きる。

「うがっ」

苦鳴と同時にごんっとな音がした…。

「……………」

誰もが一言も言葉を発することは出来ない。教室内の全員の注目を集めるなかで、

「んあ…？」

ゆつくりと赤い頭が持ち上がる。

「あー、オハヨウゴザイマス」

…それだけ？

驚きの余り間拔けな顔をしていることに気づいて周囲をこっそり見回したが、幸いなことに誰も私を見てはいなかったようだ。

それにしても、リラン先生がこんな乱暴な手段を取るとは思わなかった。大人しげで、儂げな美人な女性だと思っていたのだけど。

「おはよう、デイン君。せっかくだからデイン君から始めましょうか。」

この国の産業とその成り立ちについて、説明してくれるかしら」
リデイが物思いに耽る間に、リラン先生は授業を進め始めた。

この国を支える産業は、機鋼と魔法。

この国の民の多くは多かれ少なかれ、魔法を扱う為に必要な魔力を持っている。他国に比べても圧倒的に魔法士の数は多い。それがなぜなのかは解明されてはいないが、魔法が身近に有るのは事実だ。さて、ここで言う産業としての魔法とはなにか。それは日常レベ

ルで扱われる魔法のことである。この国では、魔法の改良に改良を重ね他国に比べ、非常に少ない魔力で効率のよい魔法を使う。例えば暗い夜道を照らす”灯し火”^{ランプ}や、地下深くの水脈から水を吸い上げる”汲水”^{ポンプ}など。

この国では魔法学院を出たばかりのひよっこ魔法士でも一日中これらの魔法を使い続けたとしても余力がある。ところが、他国の魔法士に同じことをやってもらうと半日も持たないらしい。

こういった生産系作業の補助魔法を得意とする魔法士が所属する組合がある。組合は国内外から依頼を受け、依頼先に魔法士を派遣するのである。

もちろん多くの民が魔法を日常的に扱っているギエン国内からの依頼はよっぽど大きな工房など以外からの依頼は来ないらしいが。

反面、非生産的な魔法もある。その代表が大規模殲滅魔法といった攻撃魔法である。破壊する事しか出来ない、使った後には焦土が残るばかりである。軍属でなければ習得必須とされることもない魔法である。また、殲滅魔法系の威力の高い魔法を扱える上位魔法士は国外に出る際には規制が掛かるというデメリットもある。上位魔法士が一人いるだけで戦況が大きく変わるからである。

ギエンが平和な国でいられる条件の一つとして上位魔法士の数が挙げられる。国民の大多数を占める魔法士のうち、上位魔法士の割合もまた他国に比べて大きい。つまり、ギエンは火力で他を圧倒しているのである。

もうひとつの産業である機鋼。これはギエンの経済基盤とも言える大規模産業だ。

多種多様な特徴をもつ”鋼”^{コウ}と呼ばれる鉱物を組み合わせ、形作り、さまざまな物を生み出す技術。日常生活において必要不可欠ではないけれど、あったら便利な物を次々に生み出すその技術は、どこの国にも有る。が、ここギエンでは、良質な鋼が産出されており、それを目当てに住み着いた技術者たちがいる。

彼らはそれこそ”偏屈”だとか”頑固親父”などと形容されるよ

うな気難しい人々では有ったが、その手から生み出される機鋼は繊細な美術品さながら、しかし耐久性に優れた実用品である。

ギエンは彼らを優遇した。その結果として彼らはギエンで弟子を取り、その優れた機鋼技術をギエン国内に広めていったのである。

良質な鋼とそれを生かしかきる技術。これを国を挙げて保護し、奨励している為、ギエン産の機鋼は高値で取引されているのである。

デインが話すのを聞きながら成程。とリランは思う。学習の進行速度の違う生徒が、一緒に授業を受けるメリットはなんなのか。

後から来た生徒に分かる様に説明する事。これは、説明する生徒の復習と理解度の確認を兼ねているのである。

授業は順調に進んでいく。リランが面白いと思うのは基本的に進められるのは歴史系統の授業である、がところどころで、この政変が起きた時に使われた魔法は？ではその魔法を構成するのに必要なものは何？といった具合に、他の授業の内容が組合わせられているということだ。

歴史に限らず他の授業でも同様で、座学には学問の区別は無いのだと思ったリランである。

さて午前いっぱい座学を行い、昼休憩を挟んで午後は実技である。実技は二科目を一日交代で一科目ずつ行うことになっている。そして、一日目の今日は剣術である。

——うあー、来ちゃいましたよ。將軍と補佐官が教導師ってホントに…私対処できるのかしら？

剣術の授業を控えリディは不安を溢す。

——それは、できるできないでなくやらなきゃならない。だろ？

焦って制御が緩むなんてことが無いようにな。
そろそろ腹を括ったらどうだ？

ちよつと呆れたように、だが真剣さの伝わってくる口調でディーが叱咤する。

——うう…そうだよね。

でもでも。あ、なんか手が震える〜。

緊張のあまりか、自分でもよく分からないが手の震えが止まらない。
い。

そんなリディに対し今度こそディーは溜め息を吐いた。

——リディ？少し落ち着きなさい。

いいかい。魔力の制御に関しては俺達の中ではお前が一番上手いんだ。これだけは誰も代わってはあげられない。わかるね？

それから、なにやら混乱しているようだけど、お前の目的は剣術を学ぶことだろう？

学べることを楽しみにしていただろう？だったら余計な事を考えずに目的に邁進すればいいだけだよ。

ディーに諭されてはつとする。確かにそうだ。教導師を恐れて楽しみを失う馬鹿はしたくはない。

——ありがと、ディー。そうだよね。
初心忘れるべからず。って大事よね。

——そうそう。頑張りなさい、俺達自慢の可愛い妹。^{リディ}

くすくすと軽く笑いながら、やけに甘い口調で告げてディーは気

配を断った。

こういう時、兄^{デイ}の存在は本当に頼りになるんだけど…一言余計だ、
と思うリデイだった。

のどかでない午後

景色が次々と流れて行く。周りを気にする余裕などリデアラートにはなかった。

彼女は今ひたすら逃^はげている。見えないけれど確実に近づいてきている存在から。

相手にしたことが無い存在への恐れから。

——…読めないっ。

これは何。気配の消し方だけなら師匠よりも上かもしれない。気配を感じ取ることさえ私にはできないのに。

追い詰められていることだけははっきりと分かるなんて。

リデアラートを追っているのは黒髪の少年。そう、『クロト』だ。彼は密やかに、まるで、獣が獲物を狙うかの如く、静かに彼女に迫る。

一体なにがどうなってこんなことになっているのか、全ては昼休みの終わりから始まった。

リデアラートは早めに食事を終え、体調を整えていた。現在地は第二体育館前、学院のなかでも奥まった位置に当たり『庭』に近い場所である。

ゆっくりと筋を伸ばし筋肉をほぐしていく。念入りに、そして軽く動かしておくことで、怪我をする可能性を減らすのである。なにより、ほぐしておくのとおかないのでは筋肉の柔軟性が大違いなのである。

勿論いつもそんな悠長なことができる訳ではないが、余裕が有る

時は必ず行っている。

まあ、そんな訳で授業の前にいつもの様に体をほぐしていた。

リデアラートの現在の服装は、伸縮性の高い生地を用いた暗色の上下に膝下ブーツ、丈の短い上着。肌が出ているのは首から上と手先のみである。長い黒髪は首の後ろでひとつに纏め、複数箇所を留めることでばらけるのを抑えている。といった具合で動き易さ、そして暗がりに潜むことを目的とした服装である。今は着けていないが覆面や手袋も持っている。

可憐で大人しげな美少女と実用的過ぎる服装のアンバランス加減が何とも危うい空気を漂わせていたが、そこにやってきた人物には大した影響を与えなかったようだった。

「こんにちは。早いですね、準備も終わっているようだし：僕の教えることなんて無いのでは？」

笑い混じりに放たれた言葉にリデアラートは反応する。

「こんにちは、トウマ先生。教えることが無いだなんて言わないでください。私すごく楽しみにして来たんですよ？剣術は私にとって未知の技術ですもの。ご指導の程宜しくお願いします」

笑顔で返す。ちょっと前までの動揺など一切悟らせない、いっそ挑発的なまでの笑顔で。

「：なあ、俺帰ってもいい？」

横から掛けられた声にリデアラートは驚く。そこに居たのは呆れ顔をしたクロトだった。

「おや、クロトも早いですね。珍しい」

「早く来たらなにか問題でも？」

「ええ。嵐が来ないように祈りますよ」

「：教師の生徒に対する態度じゃないな？トウマ先生」

「それはお互い様でしょう、クロト君？」

二人の陰呑なやり取りを他所にリデアラートは物思いに沈む。

気付けなかった。人の気配を読むことには慣れているのに、それ相応の技術を叩きこまれているにも関わらず、である。

これは果たして自分の修練不足か、それとも…。

取りあえず落ち着いたところでトウマが一つ手を叩いて告げた。

「さて、リデアラートさん、クロト君。まず始めに言っておくことがあります。

この剣術の授業ですが、ご存じの通り私とランディの二名が指導師を務めさせていただきます。が、こちらの都合で申し訳ありませんが、特別な事が無い限り二人とも授業に揃うと言う事は無いと考えてください」

それを聞きリデアラートはまあ、当然だろうと納得する。師匠^{ガイ}から聞いた情報が事実であれば（師匠からもちたられた情報が間違っていることなどほばあり得ないのだけれど）先生二人は大公殿下の側近である補佐官と將軍であるとのことだから、暇など無いのだろうと思う。むしろそれを考えるとよく教導師役を引き受けてくれたものだと思える。

トウマはリデアラートが頷くのを見て取ると話を続けた。

「さて、一回目の授業ですが：折角二人居るんだからお互いの能力は知っておいた方がいいでしょう。

というわけで、リデアラートさんにはここから北西にある泉に向かって貰います。クロト君にはそれを追っていただきます。制限時間は二時間。泉に着くのが速いか捕まえるのが速いか、それとも時間切れか、という事です。わかりましたか？」

話しながらトウマは端末と呼ばれる装置で宙に学院の地図を投影する。

端末は機鋼技術を用いて作られた小型の装置で、通信機能や書類作成機能、画像投影機能やらと少々便利すぎる装置である。ギエンでは広く浸透しており、現在では生活に欠かせない装置となっている。

る。

トウマが更に手元で操作すると地図の一点に目印マークが立てられた。
そこが泉らしい。

「—————今度は私が追われる番…か。トウマ先生って鬼ごっこ好きなのかな？」

取りとめもないことを考えながら方角と目印になりそうな物を探す。

必要なのは相手を騙して撒く手段。重要なのは、泉に辿り着く為の知識と実行に移す技量。そう考えると…結構ハードな要求かもしれない。

泉の有る場所の大体の位置と距離を推測しおえ、リデアライトがトウマを見ると、彼は相変わらず爽やかで読めない笑みを浮かべていた。

トウマは注目されていることに気づくと、パンッとひとつ手を叩いた。すると、地面に二つの陣が浮かぶ。出来た陣を見て、一つ頷き言った。

「準備が出来たようだね。じゃあ、行ってもらおうかな。好きな方を選ぶといい」

その言葉からして転移陣であることは推測できたが、呪文も無しに陣を二つも同時に構成する非常識に感嘆の溜め息を吐くべきか、呆れの溜め息を吐くべきか束の間悩むリデアライトだった。

比較的どうでもいい事に悩むリデアライトを横目にクロトが動く。

「俺はこっちで」

「じゃあ私はこちらね」

クロトがさっさと動いたことで自動的にリデアライトの選択も決まる。二人共陣の上に乗ったことを確認するとトウマは手を振り、

「発動」

の一言でさくつと二人を送り出したのだった。

トウマが陣を発動する直前ニヤリと人の悪い笑みを浮かべていたのはリデアラートの気のせいだと思っていたい…。

のどかでない午後（後書き）

大分時間が空きまして申し訳ありません。

こんな拙い小説でも読んでくださっている方が居ることに感謝しています。

次話もいつになるか分かりませんが、気長にお待ちいただけると嬉しいですよ。

庭にて

ずっと景色が変わる。

リディは周囲を見回し確認した。ここは座学用の講義室：それも午前に使用したリラン教導師の管理する教導室である。

ちなみに、リラン教導室は学院で最も南側に位置する校舎の東の一角である。

「見事に目的地と正反対。ちょっとした意地悪なのかしらね？」

思わず零れたばやきを拾う人は誰もいない。当然だ、午後は実技。耐魔館だとか機鋼館やらに皆行ってしまったている。

状況を把握した所で考える。利点は二つ、クロトから隠れられたこと。そして地理感のある場所に居ること。

難点も二つ。クロトの居場所が掴めないこと。人の気配が少なすぎる。

樹を隠すには森の中。人が多ければ多いほど気配を誤魔化して移動するには好都合なのである。しかし居ない物はしょうがない、気配を殺して移動する。

割り切った行動がリデアライトらしいといえはらしかったが、この時に大雑把に動きすぎたことを後悔する羽目になることを彼女はまだ知らない。

ふう…と溜め息ひとつ。吐いたのは苦い顔をした少年…すなわちクロトである。彼がいるのは大樹の枝の先。周囲の樹より頭一つ飛び出た高さにある枝の上に危なげなく立ちながら虚空に語りかける。「聞いてるんだろ、トウマ先生？陣の転移先、俺達が決めてから決定しただろう。あり得ないだろ、ほぼゴール地点じゃねえかここ。

てか、何考えてんだ。こんなほっそい枝の上に出しやがって。俺

じゃなかったら折れてるだろうが」

一旦言葉を切ると彼は殺気ともいふべき気配を一瞬だけばら撒く。

「事故で有ろうと故意であろうと…折った時は、覚悟しとけよ」

言うだけ言って気が済んだのか彼は太い枝の根元にヒョイと移り幹に背を預けるとあっさりと瞼を降ろした。

『覚悟しとけよ』

トウマは偵察宜しく飛ばしている使い魔を通してクロトの言葉を聞いていた。

彼はやれやれとばかりに軽く肩をすくめ、伝わってきたクロトの殺気に脅える使い魔をなでてやる。

「まったく、君だからそこに送ったに決まってるでしょう。まあ…クロトの森に対する思いを知らながらやったのは確かに悪かったですが。私もまだまだ判断が甘いということですかねえ」

樹上に落ち着く彼から視線を外し、もう一人、リデアライトの方へ視線を移す。

「さて、こちらはどうか」

走る、決して無理はせずに、周囲の状況を確認しながら。目的地と思われる方角へ真直ぐ突き進む。

「あ、これ魔力の影響で大分変異してるけど…多分ディストの一種だよ。今度許可貰って実験材料に貰えないかな♪」

問題も何もなく、変わったモノの多い『庭』を満喫していた。浮かれていたと言ってもいいだろう。

「!？」

唐突にリデアラートの足が止まる。意識よりも先に本能が「何か」を感じ取って。体に遅れて意識が異常を感じ取る。

「なにコレ…」

じりじりと後ずさる。

そして、リデアラートは逃げることを選択した。

走る、脇目も振らずに、ただひたすらに。

けれど、なぜ今まで気付かなかったのか疑問に思うほどにその「なにか」は、そこに居ることが分かる。いや、嫌でも理解せざるを得なかった。

「気付かれた…な。うーん、どうしようかな。追いかけるの面倒なんだけど。」

クロトはぼやく。少し間が空いた。

「追いかけるって？まあ時間切れまで待つのも嫌だしな、行くか」何者かと会話を終えると、よつと声を掛けて枝から飛び降りる。物音ひとつ立てずに着地すると迷わず一直線にリデアラートに向かって走り出した。

同じころトウマは、嬉しそうに、笑っていた。

ランディやクロト、大公が見たら思わず戦闘態勢に入りこむであろう悪い笑み、だった。

「ふ、ふふ、これはなんとも。面白い、ですねえ。」

よっぱど感受性が強いのか。気を付けないと何かに憑かれそうですね。もう憑かれ済みだったりするんでしょうか？まあ、それはそれで」

そこまで言っではっと息を飲む。

「まずい！ あれは…っ」

転移陣を作る。

放置してはおけない事態が起こりつつあった。

初めにソレと遭遇したのはリアラートだった。

「なにか」から逃げるのに必死で周囲への警戒が散漫だった彼女は殆ど無防備に正面から突っ込むことになった。

ソレは体高2 m程の狼だった。普通の狼と違うのは目が血走り、周囲に氷が浮いていることだろうか。

そのままであれば彼女は氷に貫かれていただろう。

「止めろ！」

という叫びと、

「囲め！」

という陣の発動合図。

そして、ピシと音を立てて氷が弾かれ碎ける音が重なった。

庭にて（後書き）

f 思った以上にトウマ先生の性格が掴めません。どうしよう・・・
（。。。；

遭遇

トウマは狼の背後に転移すると素早く捕縛陣を描き発動させた。クロトは怒鳴ると同時に、凍りついたように動かないリデアラートを庇う為に手を伸ばした。二人の顔に焦りが浮かぶ。

クロトの声で狼は一瞬硬直し、ほぼ同時にトウマの包囲陣が発動した。狼は捕らえられたが、氷塊は既にリデアラートに向かって飛んでいた。

間に合わない、と誰もが思った。氷塊がリデアラートに、あと拳ひとつ分という距離まで近づいた。その瞬間、今まで動かなかったリデアラートが飛び退き、同時に氷塊が音を立てて砕け散った。

クロトもまた伸ばしていた腕を引きリデアラートと距離を取った。常人ならば彼女はただ飛び退いただけの様に見えただろうが、残念ながらクロトは常人ではなく。彼女がなにかを振り氷塊を破壊するのを見ていた。

トウマはクロト程目は良くないが、それでもリデアラートが何かをしたのは分かった。そして今、リデアラートから魔力を感じていた。濃い魔力が満ちている『庭』でさえ感じ取れる程の魔力を。

「いろいろ聞きたい事は有りますが…それよりも。クロト、何頭ですか？」

トウマに疑問を投げかける者はいなかった。皆それぞれにいつでも動けるように構えを崩さない。そしてクロトが顰め面で答える。

「七頭。全部狂ってやがる」

「偶然で片付けるには余りに白々しいですね。一先ず、お相手致し

ましょう」

トウマが宙に手を伸ばし何かを掴む動作をする。現れたのはよくある魔法士特有の杖：ではなく細身の剣。

鞘ごと構え、飛びかかってきた狼を振り払う。「火壁」の一言で背後に文字通り火の壁を作り、襲ってきた氷塊を防ぐ。弾き飛ばされ背中から地に落ちる狼だったが、何も無かったように再度向かってくる。

「哀れな」

トウマは今度は振り払わず受け止めると、捕縛陣を描き発動する。

「ふっ」

「そのまま」

ほんの僅かに生じた隙を逃さず襲ってくる狼を、すかさずクロトが蹴り飛ばす。

相手に重傷を負わせず、自らは無傷で、着実に対処する二人の近くでは、背筋が震えるほど圧倒的な力が振るわれていた。

宙に吊り下げられた三頭の狼。よく見ると全身に糸が絡みついている。もがけばもがく程締まるらしく、雁字搦めになったソレらは動くことを許されなかった。

そして宙に浮く三頭の中心に無造作に立つのはリデアライト。時折往生際悪く放たれる氷塊を片腕の一振りで砕くだけでなんでもないうようにただ立っている。

何度目か。少女は腕を振るい、そして問う。

「まだ、続けるか？そうか、足の一本でも飛ばして見せようか：。安心しろ、殺しはしない。切った足も治してやるぞ？」

笑みを浮かべるが、それは決して安心できるものではなく、見る者に恐怖を抱かせる。

狂った狼にも彼女の放つ鬼気は伝わり、彼らは怯えて本能のままに暴れ出す。絡みついた糸はますます食い込む。だが、彼らは苦鳴さえ上げることが出来ない。そして、とうとう…糸に血が伝った。

ドサリと鈍い音を立てて狼が地に落ちる。すかさずトウマが捕縛するが、三頭全て酸欠により意識がなく、抵抗など一切しなかった。拘束していたリデアライトと言えば、狼が地に落ちるよりも速く、大きく飛び退いていた。ほんの数瞬前まで彼女がいた場所には異常な速度で鳶が伸びていた。

「へえ。何したの？こんな見たことない」

くすくすと笑いながらリデアライトはクロトを見る。楽しそうに。無邪気に。

「無意味に傷つけるんじゃないよ。何やったかなんてどうでもいい、お前誰だ」

険しい表情でクロトはリデアライトに対峙する。

「誰かって？可笑しなことを言うね。リデアライト以外の何者に見えるって言うんだい？」

「とぼけてんじゃないよ。物騒な気配撒き散らしやがって。こいつらみたいに狂ってない、正常な奴らが皆怖がって近づいて来やしねえ。」

大体、狼に遭遇した直後の硬直までの動きと、その後の動きが違いすぎる。言われなくても分かってんだろ」

「私も聞きたいですね。まさか気付かれてないだなんて思っていないでしょう？魔法士：それも最低でも上級レベルの魔力が駄々漏れですよ」

わざわざ言わせるなど切って捨てたクロトに続けて、トウマも白状しろと指摘する。

「これが本性だ、という説はなし？」

…まあ、俺みたいなのが可愛いリディの本性だなんて思われるのはごめんだからいいけど」

笑いを修めてリデアライトであって、リデアライトでないものが言い放つ。

「初めまして、ヒエン師、クロト殿。別人と見なしてくれるなら話は早い。」

私はリデアラートの持つ人格の一人、ヴァルディア・デイルティス・グランダード。

お間違えの無いように、この身体はリデアラート以外の何者でもありません。

情けないことですが、私は魔法の扱いに関しては未熟者。こうして魔力を無駄に撒き散らしている、という訳です。納得……してもらえただろうか？」

先程までとは打って変わり、真面目な表情で丁寧な言葉使いで言うてのける。

それに対しクロトが軽く鼻で笑う。

「それで？ 一体いつになったらその殺気を治めるつもりだ」

「教室で殺気ばら撒いてた君に言われるとはね。まあ、主張するのは俺の主義じゃないし。

……これでいいかい？」

言った瞬間ヴァルディアの気配が消えそうなほどに小さくなる。

そこに居たと知っていなければ見過ごしてしまうだろう程に。

はっとクロトは小さく嘲笑う。

「一般人離れてんな、あんたも」

ひょいと小さく肩を竦めて見せたヴァルディアに今度はトウマが問う。

「まあ、普通だとかいう規格は一先ず置いて。

君がヴァルディアだというなら、リデアラートさんはどうしてるんだい？」

「それが困ったことになっているんですよ」

ヴァルディアはよくぞ聞いてくれたと身を乗り出してみせる。

「どうも無理矢理乗っ取った所為かりデイが出てこない……まあ分かり易く言えば気絶しちゃってるようで」

「……」

どうにかありません？ と言うヴァルディアに、トウマとクロトは揃って固まり次の瞬間天を仰いだ。

「それ、すげーやばくね？」

「もしかしくなくても、君そのまま森から出たらまずいことになるよ」

トウマの溜め息と、ですよー……。とヴァルディアの零した乾いた笑いが森に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3675/>

鏡の中のあなたへ

2011年8月29日03時29分発行